

# 基督教主義の保育

めぐみ幼稚園長  
師

岩村清四郎

先日、「幼児教育」編輯部の方からお手紙があつて「若しキリスト教主義も申すものがありませば、それを保育の中に如何に取り入れて居らるゝか」云ふ質問を受けました。

世の中にはミッシン式の保育云はるゝものに對して或る型を見出さるゝらしいのであります。又實際一つの型が存在して居るゝ私も存じます。けれ共其型なるものを一種の形式として見る時には眞實のものに觸れない恐れがあります。

我國の保育の歴史を見ましても、宣教師が移入してくれた幼稚園なるものは、確かに此方面での先覺である事は否む事は出来ませぬ存じます。それだけに、古い時代に教育を受けて日本に來た宣教師が指導してくれた、保育なるものには、それだけの形式がついて廻つてゐた事は止むを得ません。こゝやつて宣教師が自分の覺えたものを傳へて居る間に米國、英國、カナダ、獨逸に於ては、それぞれの進歩を示して、形式上に於ても變化を來しました。其進歩した形を直ちに取り入れて保育をして居る教會外の人々からは、所謂ミッシン形式云ふやうな名前を以て呼ばれるやうになつた事は自然の勢かこ存じます。けれ共、ミッシンも何時迄も、舊時代に教育を受けたお婆さんへのみ指導は致されて居りません。此十年來、第一時代の人々は殆ど去つて第二時代の潑刺たる人々が入つて來た外に、指導の位置は宣教師の手から日本人の手に移つて來ました。今尙ほ、地方には所謂ミッシン形式なるものが殘存してゐるかは知りませんが、大體に於て變つた、進歩した形式でやつてゐるのであります。けれ共、私共の幼稚園には私共獨特の精神——従つて形式なる事の存在する

ここは否む事は出来ません。之が無いならば、私共の使命はないと思ふのであります。然らば其獨特なるものは何であるか申すならば、私共の世界観、人世観から出發するものでありますから、之を闡明するに非ざれば、キリスト教的の保育なるものは出て来ません。キリスト教の神観、人世観は如何なるものであるか云はるゝに人各々其體驗する所が異なる如く、其内容も千人千態ではありますが、之を大握みにしかも教育に直接に關係ある部分だけを申しますれば、

- 一、天地宇宙を創造し、之れを守り、之れを支配する神のある事、此神は全智全能であつて聖にして愛と義なる人格的存在者であること。

- 二、此神の性質、内容はイエス、キリストなる歴史上の存在を通して明かに啓示せられたること。

- 三、神の創造物の内、人間は他に比類なき存在として造られ、神に最も近く、其本質に於て神と實質に造られたこと。

「神の全きが如く全く全くなり得ること」(マタイ傳五・四八)又神のみの持ち給ふ創造力を賦與せられたること。

- 四、けれ共人間の中には其持つ神性は凡そ縁の遠い肉と云ふものが存在する。「肉の事を思ふは死なり」(ロマ書八ノ六)と使徒パウロが指摘して居るのは此點であつて、此肉の力は靈の力と相對峙して居る。此靈肉の力の戦ひが人生の綾をなしてゐる。

と云ふのであります。

ルソーが其不朽の名著、「エミール」の卷頭「神は萬物を善く造り給ふた。人間が手を出すと惡になる」を斷案を下して居るのもフレーベルが「人の教育」に「人間は其生涯に於て次第に自覺力、思考力、理解力等を現はすに至るべきものであるが、此人間が意識的に自由意志を以て其本質たる神を完全に發揮し得るやう指導を與へるのが即ち人の教育である」と云つて居るのも皆共に、此基督教的神観、人間觀から出發して居るものに外なりません。

若し保育の上に、少々なり共、他の保育と異なるものがありとすれば、右の根本概念の現はれに外なりません。

第一、私共は宇宙を必然的な善意志と見てゐます。決して偶然に存在するものでなく神之れを作り、之れを「善しと見給ふた」(創世記一ノ四)もので、我等を環る自然其物は神の善意志の現はれであります。私共は其中に包まれて、心よりの讚美をなすのであります。私共の自然觀察は、此神の善意志を見る事になります。故に私共は「人間が科學の力で自然を征服する」など云ふ對立的な言葉で云ひ現はさるゝ概念でなく、自然の神祕を開く事によつて、そこに神の啓示を見、神に近づき、神に融合し、神への躍進を信するのであります。キリスト教的自然觀は此點に於て樂天的であります。

第二、此頃流行の言葉である問題の子供は私共にはない筈であります。本質的に、神と同質である人の子は神に向つて伸びつゝあります。若し、之れが隙けられてゐるとすればそれは人間の方面、即ち、私共の方面に落度があるのであつて其子供には罪はない筈であります。故に問題の子供の重點は、其子供から移つて、其両親、家族、社會、教師に反省を求むべきであります。

第三、創造は神の意志であり、人間の特權であります。「我父は今に至る迄働き給ふ、我も亦働くなり」このキリストの御信心は、又人間の創造の歡喜であります。保育上に創造を第一義とする所以はこゝにあります。フレーベルが「人の教育」の總論の終りの方に、「抑々神は常に創造し、間斷なく働き給ふ。神が考へ給ふ事は即ち働き給ふこと、又創造し給ふ事である」云つて居るのも此概念であります。

第四、教育の目的は其個人が持つて來た天賦の力を極度迄發達せしめ、自個の個性に従つて社會のため最善を盡す事を自覺せしむるにあるのです。

私共は此自己完成の事實を一の抽象論とは見ません。歴史上の人物イエスを目標とするのであります。如何なる點を目

標さするかを申すなら「我等キリスト教徒に取つては、イエスは人類の知つてゐる内で最も高い最も完全な生命をもつてゐる。實にイエスの生命は自己存在の本源を明瞭に自覺した所の生命である。此最高の模範的生命に學ぶべき事は、各人銘が自分のため又他人のため、自ら斯の如き模範的生命となるべき事である。」云ふフレーベルの言は此事を云ふに外ならないと思ひます。

第五、ブラット教授は、宗教には四つに分けらるゝ特殊な氣風がある云つて、一、傳統的な氣風。二、合理的な氣風。三、神祕的な氣風。四、實際的な氣風とし、此氣風は其人の性質に從つて、其屬する所が定るけれ共亦年齢により、幼少の頃は、傳統的に、長じては合理的に、神祕的に、實際的に變つて行くを指摘して居らるゝが、之れを若し眞とするならば、幼稚園での宗教指導は此傳統の方面から入らねばなりません。即ち形式的、歴史的な、具體的な方面であります。

之れが具體化されたものに、朝の輪があります。祈、讚美、談話となつて現はれて來ます。之れも決して、形式によつて宗教を強ひるのでない事は申す迄ありません。人間の本性に備はる神性が、幼少の頃には、此様な形になつて現はれて來るものであるから、其赴く所に從つて誘導する云ふに外なりません。

以上、取り止めもなく述べましたが、も一度振り返つて見ますならば、教育の目的とする所は—學說によつて違ひも致しませうが、人間として最高の理想に醒めしめ、それを自身に實現させやうとする努力に外ならないとすれば、取りも直さず、宗教の求むる所と同様でありまして、宗教は其特長とする感激を以て、此事業に當るのであります。

之れを要するに、宗教幼稚園の特長、否キリスト教幼稚園の特長は、神を信じ、人を信じ、之れより起る感激によつて保育に當る云ふのが、特長であらうかを存します。